会議レポート

IFIP TC3 カンファレンス 2015 の参加報告：自国の代表の立場でカンファレンスに参加することの意味とは？

「2020 年以降のカンファレンスの開催地，どうしようかと思って．日本はどう?」．会議初日，午前のティーブレイクに向かう廊下を早足で歩きながら，座長の Sindre Røsvik は唐突に話を振ってきた．今年（2015 年）の 7 月初旬，リトアニアのヴィリニュスで開催された IFIP☆1 TC3☆2 カンファレンス☆3 会期後の, TC3 定例会議の合間のことであった．

昨年度より TC3 の日本代表を仰せつかり，毎年 1 回開催の定例会議に参加し，今年で 2 年目を迎える．この役を引き受けてから，時折日本での TC3 カンファレンス開催に思いをめぐらすことはあった．だが研究者として足場を固めることに精一杯の現在の私に，そのような役目をいますぐ引き受ける力があるとは少しも思えなかった．

ところで今年の TC3 カンファレンス（7 月 1 日～ 3 日）では全 77 件の発表があり，そのうち日本からのものは 4 件であった（加えて論文掲載のみが 1 件）．これでもポツダムで開催された昨年に比べれば多かったはずである．「代表」の肩書きが付くと，自分の至らなさは棚に上げて，国際的な研究コミュニティにおける日本のプレゼンスだの貢献だのをつい気にしてしまう．

では，海外発表の選択肢として TC3 カンファレンスにはどのような魅力があるのだろうか．私は，国内の研究コミュニティとは少し（あるいは大きく）違った関心に身を置くことで，日頃自明視しがちな「<情報教育>や<教育における情報技術利用>を研究することの意味」を問い直さざるを得なくなる点が最も大きな魅力であると考えている．

実際にカンファレンステーマやキーノートの演題には，たとえば教育機会均等や持続可能な開発といった，現在，世界中で取り組まれる教育課題への関心が強く反映される．また，その関心の中で情報技術の専門家は常に，教員や実践家や政策立案者といったステークホルダたちと連携しながら問題解決にあたることで，積極的に社会的責任を引き受ける存在として位置づけられる．この傾向は IFIP，とりわけ教育分野を扱う TC3 と，UNESCO との関係の深さによるものと思われる．このような関心に触れることは，国内において情報教育の価値や重要性を主張すべきこの分野の研究者や実践者にとってきわめて得るものが大きいのではないか．

☆1 International Federation for Information Processing：情報処理国際連合
☆2 Technical Committee 3：IFIP において主に教育に関する分野を扱う部門
☆3 IFIP TC3 Working Conference A New Culture of Learning：Computing and Next Generations（http://www.ifip2015.mii.vu.lt）

図 -1　TC3 定例会議出席者によるディナーの風景．手前の人物が Valentina Dagienè，奥側で立っている人物が Sindre Røsvik

加えて論文投稿や発表において求められる英語力の水準がリーズナブルである点や，人と人とのかかわり方が密でフランクかつ互助的な雰囲気が勝っている（要は過度に競争的な雰囲気がない）点なども魅力として挙げられよう．

人といえば，今年の TC3 カンファレンスの実行委員長はヴィリニュス大学の Valentina Dagienè 教授であった（**図 -1**）．今年は TC3 カンファレンスの直後に同じ会場で ACM SIGCSE☆4 主催のカンファレンス（ITiCSE☆5）が続けて開催されたのであるが, 彼女はここでも実行委員長であった．彼女は，その風貌（年配で小柄の女性である）からは想像もつかないエネルギッシュさで現場を走り回り，滞りなく 2 つのカンファレンスを取り仕切り，その中で個々の参加者にまで気を配っていた．たとえば私に少しの時間があると聞くや，ヴィリニュス大学構内の教会にあるパイプオルガンの演奏会があるからぜひともお聴きなさいと，申し込んでもいない ITiCSE のレセプションに出られるよう手配までしてくださった．彼女の姿を見るにつけ，自国の「代表」として自分がこの場にあることの意味を考えぬわけにはいかなかった．

そして冒頭の件，会議の場で改めて Sindre から日本が候補地の 1 つとして挙がっていることが告げられ，引き受ける気はあるかと尋ねられた．それに対して私は「Yes」と答えた（「実際には私の一存ではどうにもならないので，IPSJ に持ち帰ってから検討させて」と付け加えた上で）．何人かの会議メンバは「大丈夫，カンファレンスの仕切り方なら俺が教えてやるから」と協力を申し出てくれた（どこまで信用していいのだろうか?）．またほかのメンバたちは「日本に行きたいからぜひともやってくれ」とわざわざ言いにきたりもした．

ほかにも複数の候補地が挙がっているため，この先どうなるかは分からない話である．しかし Valentina には及ばぬにせよ，カンファレンス開催を通してこの分野の発展に微力ながらも貢献できるのならば，それは夢のある話だなと思っている．

（斎藤俊則／日本教育大学院大学学校教育研究科）

☆4 Special Interest Group on Computer Science Education
☆5 ITiCSE: Innovation and Technology in Computer Science Education（http://www.iticse2015.mii.vu.lt）